屋 き 又左 小 か 石 ん 衛 Ш 気 門 水 道端 年 は 取 質 屋 つ て 渡 e s る 世で二万 が 昔 両 は二本差だ 0 大身代を築き上 つ たそうで恐ろ げ 田 代

Þ 11 P 11 ح ん な 湯 入 5 れ る と思う か 風 邪 を 引 く じ Þ な 11 か

馬鹿馬鹿しい」

風 呂場 か 5 町 内 中響き渡るよ う に 怒ど 鳴な つ て お ります。

「ハイ、唯今、すぐ参ります」

です。 た どとい 0 が、 お冬、 女中も庭男も う 頑 器 外か 固 用 な 5 な 鉄 油障 P 砲 4 な 風 0 が 呂 子を開 か あ で、 ったと見えて、 りませんから、 けて、 急 に はうまく 手頃の薪き 奥か 燃え 忽ち風呂場 を二三本 5 飛 つ か 出 な し 投 た 11 杯に漲る 上 げ 0 は 込みま 煙突 伜 0) 嫁 煙

禁物だ おう。 あ ッ エ ^ れ ン エ は たま ^ ン ら エ **k**2000 ^ ヾ 工 寒 ^ 11 ン 工 0 は ^ 我 ン 慢するが、 工 ^ ヾ そ 年寄 を 開 K 煙 け は て 貰 大

りますか どう しま <u>ئ</u> ょ う、 ち ょ つ ٤, お 待ち下 さ 11 0 燃え 草 を 持 つ て

置 若 方 11 嫁は、 ^ 飛 ん 風 で 呂場 行 つ て 0 障 子 ま を 11 ま パ た。 イ に 開 け たまま、 面 喰 5 つ 7

物

衛 門 底冷 0 裸身を吹きますが、 0 する梅二月、 宵と言っても身を切られるような風が又左 す つ か り 煙に 咽せ入った又左衛門は、

流しに踞まったまま、 大汗を掻 いて咳入っております。

そ の 嵵 でし た。

少 どこからともか 前 屈 みに な つ た く 飛んで来た一 又左衛門 の二の 本 0 腕 吹 ^ 矢、 深々と突 咳き込むは つ 立 つ ずみに、 た ので

あッ

す。

心 得 のな 11 人では ありませんが、 全く闇 の礫で です。 思 わ ず 悲

をあげると、

どうしたどうした、 大旦那

店からも奥からも、 ぺん に風呂場に雪崩込みます。の声のようだが」

引抜くと油 に、白々と立っ 見ると、 裸体 で痛 たのは、 めた竹の根は、 のまま、 流 羽ごと六寸もあろうと思う一本 しに 突 鋼鉄の如く光って、 つ 起った主人又佐衛 美濃紙を巻い 門 の 左 吹矢、 の腕

た羽を染 め た のは、 斑々たる血 潮です。

俺 は 構わ ねえ、 外を見ろ、 誰が一体こんな事をしやあ が った

飛 出すと、 豪気な又佐衛門に励まされるともなく、 庭先に呆然立っているのは、 埃除は 二三人バラバラと外へ の手拭を吹流

冠 って、 燃え草の木片を抱えた嫁のお冬、 美し 11 顔を硬張らせて、

御新 造様 どうなさ () ま した」

宵闇

の中

にどこともなく見詰め

てお

ります。

っちへ逃げて行ったよ。

追

つ

駆

け

御覧」

誰

かあ

と言 いますが 庭 に 4 木戸 K \$ 往 来 に b 影らし 11 0 は

見当た りま せ $\bar{\lambda}_{\circ}$

な物が落ちて e s ます」

稚 の三吉がお冬 の足元から拾 11 あげ た の は、 兀 尺あまり 0) 本

玩もちゃ 定 矢 江 0 b の 戸 で ン吹矢筒、 Þ す 0 町 当 が 初 人 期には 鉄砲 幅 0 を利 遊 竹の節を抜いて狂 0 び道具にな 武士もたしなんだと言 不自由な時代には、 か せ た頃です。 りましたが、 e st を止めた上に、 これでも立派な飛び道具で、 われる位 ے の 時 分はまだまだ、 磨きをかけたも 後 に は 子供 吹

余事はさておき――、

た 暁 て 方 置 引 きま 抜 か け 11 た て あ 又佐 た とは、 が 衛 そ 門 つ 0 0 まらな 晚 腕 か は 5 樽 い瘡薬か 大熱を発 0) ように 何かを塗 して、 腫は れ上が 枕 つ P つ て、 上 て が しま そ 5 0 ぬ 儘 騒ぎ まし に

麹 町 ら 名 高 e s 外 科 を 呼 で 診 て b らう

れ は 大変だ し か 破傷風 に てもこんなに 早く 毒 が 廻る

はない――吹矢を拝見」

け細らしく坊主頭を振ります。

な 0 上 昨 つ 夜 ^ 置 の吹矢を、 ま *()* たの つ た 0 を、 です。 後 で詮索をする積 誰 0 仕 業か 知 り り ま で、 せ 6 ほ が ん 0 瞬 暫 う 風 ち 呂 に 場 な 0 棚

「誰だ、吹矢を捨てたのは」

佐 衛 と言 門 った 大 怪 ところで 我 をさ b た う後 当 が 0 祭 ŋ, 後 0 故意 祟た ŋ を か 恐 過ち れ か て 隠 兎 に 7 角、 又

たことだけは確かです。

が そ 塗 つ は て 惜 あ 9 た 11 か ع P を 知 れ た ぬ て ع に ょ る そ 0 吹 矢 の 根 に 毒

「え、そんな事があるでしょうか

又佐 衛 門 0 伜 又次郎 ح れ は 次 男 に 生 れ て 家督 を 相 続 た手 堅

落す外はあるまいと思うが、 廻 13 「そうでもなければ、 つ 方 て は、お気 の若者、 の毒だが命がむずかしい。今のうちに、 今では田代屋 こんなに膨れるわけが 如何でしょうな」 の用心棒と言って な *(*) e s い程 ح の の 腕を 毒が胴に 男です。 切り

佐衛門は武士の出というだけあって思 こう言 わ れると、 又次郎はす つ かり蒼くなりました いの外驚きません。 が 父 の又

マ れ は何でもな いことだ。 右の腕 一本あれば不自由は

我 慢 0 微笑を浮 べます。 サア」

千貫目 の舞り を 掛 け ら れ たよう な腕を差出して、 苦痛に歪

して、 「ネ、 親分、 親父の片腕を無くさせた相手を取 右 0 通 りだ。 田 代 屋 の若 旦 那 っちめて下さい が 銭 形 0 親 分 に つ お 願 拝 11

多^た寡ゕ が子 供 0 玩 具 0 吹矢なら、 洗 *()* 立て て、 反 つ て 気 0

ことに な りは しな いかし むように言

いま

したぜ」

銭 形 の平次は、 容易に 動く様 子もありま せ ん。

「吹矢 は子 供 0 玩具でも、 毒を塗るような手数なこ とを は

大人でしょ う

「それ は解るも 6 か

の 吹矢筒 の吹 П に は、 女 の 口 紅 が 付 11 て 11 た つ て言 ま

すぜ」

「何だと、

八

p'

田

代

屋

0

ツイ隣

K

世帯を持

つ

た

b

のだ」

そ お 出 でなすっ た。 ح の一件 を打明けさえすりゃ 親 分が

り出すに決ってると思ったんだ」

ガ ラ ッ八はす つ か り 悦 に入っ て 内 懐 か ら出した掌 でら ポ ン ح 額

を叩きます。

だけ。 は気が気じゃ () るんだ。 正味もおまけもねえ。 そり 疑 () は そ Þ ねえ」 の上、 真 本 当 一文字に恋 か 吹矢が 0 無 吹矢筒 駄 女房 飛 を言 ん で来た時、 の吹 ^ わ 掛 ず 日に、 つ に て行 ` 正 外に こっ く 味 か 0 5, いたの て ところだ り 口 又次郎 紅 は 嫁 が け 付 0 お () 7

フム」

え、 言 銭 e s ますぜ あの 形 0 女は 親 分 に そ お 願 ん な大それたことの 11 て、 何 ح か お 冬の濡 出来る女じゃ れ が 干 ねえ て P り つ 7 7

ラッ八、 誰 しも手前 その吹矢 0 恋 は 女 房 ___ 体誰 を悪 党 0 だえ」 ح は 思 11 た < な かろう。 とこ ろ で

「それが可笑しいんで――」

何が?」

水道端 親 分も 0 又五 知 つ て 郎 (J って、 なさるだろうが、 親仁に も弟にも 田代屋の 似 ぬ 総領という 恐ろし () 道楽者だ」 0 はあ の

う あ 0 水道 端 の又五 郎 は、 田代屋 0 伜か

取 () 「それ 7 つ ま ですよ つ たが に 親 な 分、 る、 年ば 留吉 十年も前 と か (J り前 う に勘当されて、 伜 • を伴 芸妓上りのお半といげいしゃあが れ て 帰 暫く街道 つ て来て、 筋じ う女房と、 図々しく をごろつ

蛮 「フフ、話は面白そうだな

ガ

縄

付を出

ても仕方がな

1,

吹矢を飛ばした女を突き出せ

呆れた野郎で、 世間では、 田代屋の身上に未練が あ つ て、 古巣

を見 り か たがた戻 って来たに 違げえねえ つ て言 () ます ぜ

「そんな事もあるだろうな」

吹矢はその 小伜の留吉のだから面白 () で しょう」

何 八、 なぜ早くそう言 わ ねえ」

ツ、ヘッ。 話をこう運んで来なくちゃ、 親分 が 動き出さねえ」

「馬鹿野郎、掛引なんかしやがって」

そ う言 いながらも平次は、 短 か () 羽織を 引 つ 掛 け て ガ ラ ッ 八

を追 つ立 てるように、水道端に向 e s 、ました。

け 細 あ 先は多寡が質屋渡世 つ 行か て 公 な 儀 か か らお つ た 声 の です。 0 0 田 掛 代屋 つ た 家柄、 ですが、 まさか着 二万両 流 0 大身 で 出 代 か 0 ける 仔

Ξ

向 うへ行 って 見ると、 待 ってましたと言 わ ぬ ば か \mathfrak{h}_{\circ}

形 0 親 分、 よくお出 で下さ () まし

若主人、 又次郎は、足袋跣足 のままで、 店 \Box か ら 飛 出 庭木

戸を開けて、奥へ案内してくれます。

分、 ح れ は 若 旦 那 0 又次 郎さんで

ガラッ八が取なし顔に言うと

気質で 「有難う御 出 で下す 、腕一本は惜しくないが、 座 つ た いました。 んで、 どんなに心強 滅多に人を縛らな 家 Ó e s 中の取締りがつかな か わ か 11 という銭形 りません。 の親 4 分が は昔

す。

出来ることなら親仁 0 11 こう申します。 ま 当て つけた言葉で、 吹矢を飛ばした奴と言わずに女と言う の迷いを晴らして、 私 共夫婦は途方 家内を助けてやって下さ に 暮れ てし ま 0 は、 11 ま 家 内

次郎 山 は 0 泣 手 き出 0 広 「さんば *(y* 構なかまえ 土蔵 か りの ع 様 店 子 0 で、 間 を抜け こう囁きます て、 母ぉ 屋ゃ ^ 廻 る道 々 又

した れ は や 思 が て奥 i s 0 外元気で、 へ通 って、 床 大主人の又佐衛門 0 上 に起直 って平 に引合され 次とガラ ま ッ 八 し た を迎えま が ح

銭 形 0 親 分だそうで、 よくお 出 で下さ () まし た

飛 だ 災 難 で 御 座 いましたな、 どんな様 子 で ?

を塗 りま 刀 な か せん ア つ た で向 吹矢を か 腕 つ 0 一本位 て来るなら兎も角、 射ると に 驚く私じゃな いうのは、 風呂 女 の () 腐 が、 場で煙責に った Þ り口が のが するこ て置 如 何 とじゃ に 11 も憎 て 毒 e s

物 しょ 自ゃ 棄ゖ 馴 暗 れ う に 嫁 灰 た平次も 七十近い厳乗な身体に、新しい忿怒が火 吹を 0 お冬と言わ 叩きます。 少し扱 い兼ねた様子です。 な 成 e st 程 ば 福 かり、 島浪人と言う 無事な右手に握 0 は嘘 0 でな 如 つ た か 燃えて、 煙管で、 ったで

吹 矢 筒 は そ 0 儘 に してあるでしょうな

と平次。

寄っ 大 事な証 又 壁際に立てかけてあった吹矢筒を取って、 次 郎 拠 です が 手を出 か 5, 私 そう の 側から離 に する のを しゃしませ 止 め て、 ん、 自 平 次に渡 分で ح の通り」 膝に行さ しま ŋ

平 次は受取 つ て、 端 つ こを包ん だ 手拭をほぐすと、 中 か ら現わ

れ た 0 は 成程 は つ きり 紅 11 \boldsymbol{b} 0 0 付 11 た、 吹 П

「そうでしょうね」

ね、

銭形

0

親

分、

紅

で

ょう

次 は 気 0 乗らな 11 顔 を て と 通 ŋ 吹 矢 筒 を 調 ると、

「矢は矢張り見えませんか」

解り切ったことを言います。

「それが見えないから不思議で――」

たし か に 毒が 塗 つ て あ ったで しょうな」

は そ 江 戸 れ は 間 番と言 違 () あ わ れ りません。 る方だ。 そ 神 0) 楽坂の本田奎斎 方が診 て言うん 先生、 だか 5 外 科 れ は で

確かで」

成程 とこ ろ でそん な恐ろし 11 毒を手 に 入 れ る 0 は 容易 あ

りませんね」

ところが、親類に生薬屋があるん

ですが

ね

「えッ」

「嫁の里が麹町の桜井屋で」

目 平次は 桜 井 黙 屋 ح つ て いうと、 この 頑 Щ 固な 0 手 老人 で は 評 の 判 顔を見上げました。 0 生薬屋で、 お 冬 麹 町六 里 がそ

こだとすると、 これは 全く容易ならぬことに な ります。

打 な 野郎 5 どうで に け は る しょう銭形 と家 相違あ 0 恥 りません だ の が、 親分、 が、 隣 に これでも疑う私が 近頃は 住 6 で いる総領で 幾らか 固くもな 0 悪いでし 又五 郎、 ったようだ ようか。 ゃ

自 分 か ら進 ん で親 0 側 ^ 来る位だ から、 少 は人心も つ

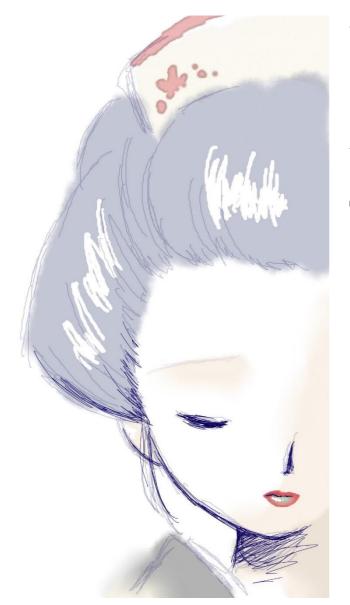
()

た

た者 郎 料 が が に が ツ 取 よう。 は あ な る 顔をするが、 四五日前の事だ。 除 道がな んだから変でしょう け 私も取る年なり、 て 置 e st いた分だけでも孫の留吉にや じゃあ 私 の身に その舌の乾かぬうちに りませんか、 取 いずれ勘当を許して、 って見ると、 こんな事を言うと、 ね、 銭形の そうでも考え り た 私 せ 0 命を 伜 め 0 又次 狙 隠 た

が 5 洩 たも ず 又佐 れます。 衛門 滑 るよ か の心 又次郎 う に 持 敷居 は 0 益 た 0 外 々 明 な め 出 か る声の下から、 る で した。 ٤, 誰 Þ 又次郎は らそこ ク 席 で立聴きを ッ と忍び泣 に \boldsymbol{b} た た

す せて下さいません ちょ 御 \boldsymbol{b} っと、 つ お宅の \boldsymbol{q} か です 間取 が ŋ 私 から、 に は ま だ 風呂場の様子、 腑ふ に 落 ち な 11 雇人の が 顔も見 ま



BI

©2017 萩 柚月

を移

うます。

サ ア、 そうぞ れ、 親分を御案内申しな。 自由 に見て頂く

んだぞ」

「ハイ」

家業 次の の 厳ぃ 間 り め 外 か 5 に 11 出 は 眼 を避 何 て来た又次郎、 0 楽 けるように しみも望 み も持 いそいそと先に立ちます。 若 い美し って (J e s な 、女房に溺い いら 11 れ 若者 切 つ て、 父

四

これが家内」

て、 んとな 先ず申分な 郎 ハチ切れそうな感じのするお冬、 に 引合され e st 嫁 女振 た の りです。 は、 ひどく 、打ち萎、 れ 丈夫で素直で、 ては お り ます 美しく が な

「それから、これが妹分のお秋」

日 陰 れ 花 は お冬にも優して美しい容貌 のよう にたよ りな い娘です。 ですが、どこか病身ら 年 の頃は十八九。

腰態 町 け で、 家に て 度 Þ 頼るところもな 育 って は 後 った、嫁 何となく上品なところさえあ いる娘だ で又次郎 0 c y つ お冬よりも遥かに美しく見えます。 に 身の上を気の毒に思って、 たのです。 聞 いた事ですが、 如何にも育ちは良い って、 妹と言 見ように っても実は 三年越し目をか らしく、 ょ

間 な 話 続 P 0 11 ら、 て大番頭 数 商 で 売 す が の長兵衛、 0 事や 平 次は らを 手代 訊 面 ね 倒 て、 臭そう の信吉、 お勝手 な様 皆造、 か 子も ら風呂場の な 丁稚小僧ま 人 方 人 で な 世 か

名 前 る も掃か 調法な男です。 だけ 働きはお増というきかん気らしい中年者、飯炊きは信働きはお増というきかん気らしい中年者、飯炊きは信 せられ、 は 色男ら ボ ン ヤ *()* 権三 リ突っ起って 郎。 合間 合 e s ると、 間 に 風呂 使 「も焚か い走りもさせられ せ 5 州者 庭

ね と通り風呂を見 親分、 ここがその又五郎って、 廻 つ た 平 次 は、 油 障 兄貴の家で 子 を 開 け すぜ」 7 外 ^ 出

何 の 間 に Þ 5, ガラ ッ八 が 縋っ e s て 来 て 囁 きます。

も流しに立 風呂場の障子が開けっ放しにな 吹矢を飛ばした上で、 っている人間へ吹矢が届かないことはな 筒を向うへ放り出すと一 っていると、 この垣の根からで いでしょう、 度あの辺_

際 かせる もっとも、 の良 から、 いことは出来ねえ。 ここから五六間あ 道楽者に は、 飛んだ吹矢の名人が ح の節は る から、 両 国 あた 馴れなく ŋ いますぜ」 の矢場で吹矢を吹 ・ちゃ、 そん な 手

エ

「馬鹿

ッ、

何を

つまらねえ事を言う

んだ

黙

っていろ」

妙にからんだガラッ八の言葉を押えて、 平次は垣の外から声を

掛けました。

何を言やがる H は 又五 郎さん ここからでも吹矢が届かな は *()* なさる か *(*) 今日 は いことはな 4

なんて、 厭がらせを言やがって一体何奴だ」

0 狭 身を落 飛 出 11 袷 した 0 した又五 胸をはだけて、 0 は、 又次郎 郎です。三十を大分過ぎた、一寸良い男。 の 兄、 かけ守袋と白木綿 田代屋の総領 に生 の腹巻を覗か れ て、 やくざ者 。藍微塵 せた恰

好で、縁側からポンと飛降ります。

あれ お前 さん、 銭 形 0 親 分 だよ。 滅多なことを言 つ 7 お れ

でない」

の跡青々 ます。 越 したか 後 か ら と思う、 袖を押えるように、 紅を含んだような唇が、 美し W 年増、 続 襟 11 て 0 庭先に 掛 物を言う つ た 出た 神線を 毎 を 0 引 は、 に妙 つ に か 十 なまめき け て を 少 眉ゅ

掛 は 破るぞ」 て け す *()* 何を 5 て つ か e st れるけえ。 ッ、 る又五 り改心して、 銭形だか、 一郎だ。 憚りながら、 馬方 親 間違 0 だ つ いる方には足も向けて寝 か たことを言や 知らね 親子勘当は え が され 厭 がると、 な て 事 を言 e s る 土手 ねえよう が わ れ つ 腹を 7 黙 0 節 つ

兄イ 勘 弁 し て くん な、 た 11 し た悪気で言 つ た わ け じ Þ あ め

え。 なアハ、 手前 \boldsymbol{b} 謝 まっ て ま 11 な

平次は二人の 間 ^ 食込むように、 垣根越 しながら、 又五 一郎を宥なた

めます。

事を言 銭 形 のが やがると、 そう言 生か や、 今度 しちゃ置 だ け か は 勘弁 ねえぞ、 て 態ま ア Þ ら 見や あ。 がれ 度とそ ん

又五 郎 中 は 引込 少し 間が一 んで 悪そうに、 しまいました。 ガラ ッ 八 0 頭 か 2ら捨台詞をい 浴 び せ

五

外 サア、銭形の親 の者だっ て、 遠慮することはな 分、 もう 何 もかもお *i* 1 解 縛 りだろう。 って引立ててお 家 0 者だ < つ んなさ て、

11

ん な 外 の後 か 5 帰 か 5 つ 蹤っ て 来た 11 て来 平 た嫁 次を見る 0 お冬を ٤, 睨 又 佐 め 衛 廻 門 します は () き ŋ 立 つ 7 皆

造 で 旦 那 e s まだそこまでは解 ことだけ は 確 か で すよ」 りません が 吹矢を射た 0 は 御 新

え ッ 何、 どうし てそん な 事 が 判 り ます」

な

た る な な 5 吹矢筒 b ほ 11 ど が 0 付 \boldsymbol{b} に う そ 相 0 11 違あ 少 れ \Box て を は 11 薄っ 唇 b り る ま す う か で せ 5 り ___ 度見 よう。 ん 付 付きます 11 た て 下 そ λ れ が じ さ は、 ` ゃ $\epsilon \sqrt{}$ あ 0 筒 紅 付 0 ŋ ま \mathbf{III} П () は か せ 7 紅 ん ら e s 指 が る 笹さ 唇 で 0 筒 色な か は 5 0 紅 な 付 П つ 61 相 た W 違 61 つ

え ッ

ま ح 0 見 に 中 紅 た た 11 で た者 を塗 ع ょ は 御 ろ、 新造 つ 0 て、 指を だ ほ 見 庭 け W だ。 り ^ 0 捨 少 や 誰 て て か で 置 \sim 悪 b W 41 11 に た 奴 П ん が 判 紅 そ を で 9 さ た れ 6 を ょ う。 だ 知 て が 9 11 惜 そ る 7 0 61 0 時 は 7 直 吹 ع 矢 を 筒 0 そ 0

フ 厶

銭 形 平 次 0 明 察は ` まなごころ 指 す よう で 又 佐 衛 門 P 承 服 な 61 わ

け は 11 きま せ ん。

た まだあ が 私 りますよ。 は 見 当を 吹 つ け 矢 は 7 探 風 す 呂 0 棚 0 上 ~ W か に ら 見 な < 2 か な つ 9 た 7 と言 11 ま ま

ح れ で ょ う

٤, そ 次は二 0 中 つ か 折 ら 現 り に わ れ た た 懐 0 紙 は を 紛ぎ 出 れ \boldsymbol{b} て な 又 11 磨 佐 衛 61 た油竹 門 0 前 に 押 美 開 紙 0

羽 をつ けた吹矢 b っとも吹矢はすっ か り 別 に 塗 ^{まみ} れ て、 紙 0

羽などは見る影もありません。

あ ッ これ だこれだ、 どこに あ りま た

「それを言う前に 伺 つ て置きますが、 御 新造は、 そ 0 晚 外 ^ 出 な

かったでしょうな」

え、 風呂場からお父様をここへ お運びし て、 そ れ か らズ ッ ع つ

き切りで御座いました」

お冬 は 救 11 0 綱を手繰るよう に ` お どおどし な が ら言 11 切 ま

す。

「そう で ょ う ところでこの 吹矢は庭 0 奥 0 土 蔵 0 軒 に、

土の中に踏み込んであったのです」

「えッ」

「それ \$ 女 の 下駄 な ん か じ Þ あ り ·ません。 職 人や遊 び 人 0 履

麻裏で踏んでありました」

ーホウ」

又佐衛 門 b又次郎 Ŕ 声を合せて感嘆しました。 そ の 座 0 驚

きに誘われるように、

有難 う御 座 () 、ます。 銭 形 0 親 分、 私 は、 もうどうなることかと

思いました」

冬 は 敷 居 際 泣き伏 7 しま いまし た。

六

事 件 は こん な事では済みません でした。

紛 れるともなく経 つ た、 ある日 のこと、 平 次の家 ^ 鉄砲玉 のよ

う 飛込ん で来たガラ ッ八。

親 分、 大変 ッ

何だ ガラ ッ 八 か 相 変らず 騒 々 し *()* ね

落 着 41 て () ち Þ 11 け ねえ、 田 代屋 0 間が にされ た ん です

ぜ

何だと、 八?

銭 形 の 平 次も驚きま た。 あ わ 7 者 0 ガ ラ ッ 八 言う

殺は 穏 ゃ か ではありま せ ん。

そ れ ッ

代 は 中 11 もう息 家全部 屋 でも ガ ع ラ 神 は 表 田 ツ八 番先 根が絶えてお 何を食って か 0 大戸 が 5 に腹い 聞き噛 水 を締 道端 痛っ ま を起した小 か め つ 恐ろし た、 て、 で、 りました。 鏖殺 中は煮え 足 e s 飛 僧 中毒 0 びにス の三吉 噂 く で、 にはおまけがありましたが、 り返 は、 ッ いずれも虫の息 飛ん るような騒ぎです。 平次が駆 で行 け つけた時 0 成程 有様、 田

お ら れ ŋ お 年 た ますが、 蔭 は らしく、 で 取 助 つ ても、 か 日頃 つ た 藍ぃ 嫁 から丈夫で 剛気な又佐衛 の ような 0 お冬と 顔を な 緒 門 し W 養い娘 に、 て は、 悶え苦しん 家族 __ 番気 0 お秋 Þ 5 が 強 でお は、 店 0 ります。 者を 番 ح 介抱 れ ひど \boldsymbol{b} 少食 て

が ち平次は 町 何 分、 主 から五 病 人 が 多 組 11 0 者も 0 ٤, 駆 急 け のことで手が つ け、 医者 も三人まで 廻 りませ ん。 呼 びま そ う

でなく、 ガラ ッ 水ず 瓶がめ P 手 朝 桶 食 bつ た 物 つ 残らずや ^ 皆 ん るん な 封 だ、 印 を 解 ろ つ た か 鍋 ゃ \mathbf{III} ば

「合点」

工

まっ 親 切 平 た 次 で か 0) Þ ょ 0 り方は機宜 う。 弥 次 馬 に 荒されて、 を掴 みまし 何が た。 何だ もう半刻放 か わ からな つ て置 く な e s つ たら、 てし

ら届 は、 行 きませ 吹矢 生死 出 て朝 で \boldsymbol{b} 腕 ん 解 のう 5 本 ちに 家 失 ぬ 有様です 中 つ 検婦し 毒 た を 時 起 が ع 下 か 違 し 5, だ て つ る騒ぎです。 小 て 僧 平次が行き着 が 今 度 ___ は 人 死 事 件 ん だ を 揉も 前 上 に み 消 あ 町 す 役 わ け か に

恐ろ 晚 W に \boldsymbol{q} か が 町 あると 医 い毒 者 お 勝 立 み 込 が 会 手 4 う始 仕 11 込ん **水**ず で 0 末、 置 上 甕がめ で 11 あ た 突き詰 11 -早支度をする 水 ろ つ た 0 11 0 中 め ろ に 調 で て す。 行く は、 べ て 見る ٤ ので飯炊 馬を三十 ٤ 井戸 匹 き は 毒 b 0 何 は 権 般なお ح 朝 \equiv P せ 0 る 郎 あ 飯 が ほ ŋ 前 ど ま P せ 汁

聞 は 驚 ح が 11 た な 61 0 ح れ 附ぶ ほ 子し بخ Þ 鴆な と言 猛毒 は、 つ た とこ H 本 ろ は で、 もと ょ ح れ り 唐ら 比 天ん 生く べ る に

と、奎斎先生舌を巻きます。

知

れ

たも

の

だ

す る そ 0 辺 0 生 薬屋 で売 つ て 11 る と言 つ た ザ ラ 0 毒 は

いでしょうな」

と平次。

少し ح ع 左 様 ば な か 11 ŋ れ П ほ ح ^ ど れ 入っ は 0 多分、 ただ 水 甕に け 入 で れ 命 南蛮筋 7 に係わ 色も 0 ると P 匂 0 11 $\epsilon \sqrt{}$ で b う もあ 味も 毒 ろう は 私 5 ず 聴 ほ W た

0 耳掻 で は き な 11 杯 ほ どの ヤ 鴆ん 何百金積 毒と でも、 んでも手に入らな 何百 金を積まな け 11 れ 0 ば が普通だ」 手 に 入るも

た、

角

な袋が一

忍ば

せ

て

あ

つ

た

0

で

す

奎はさい 老 の 述懐 は、 益 々平次を 驚 か すば か り で す

せずに な が 少 夜ゃぜん 11 しも 矢張 引 変 つ り つ み 家 て 込 0 11 ん つ な だ 中 て 下 水 0 11 さ 甕 者だろう。 ところを e s ^ ょ そ 見ると れ 銭 ほ ど 形 の 0 これは 親 毒 分、 を入 れ 今 度こそ た 0 者 0 に 0 は、 仕 事 戸 遠 で は ŋ

甲 道 な P を 心 又佐 起 れ てこ 衛 く病人達を介抱 0 したと言っ お 門は気を 6 な事を言 これは 取 た顔色、 り直 又 不 して e st ま 舅に 思議 て、 お す。 ります 当 に __ e s 本 丈夫でほ て やな 腕 つ け 0 事を言わ 5 不 れ 自 ん 由 7 0 少 さも 11 れ る な ば 0 が は言 か 毒 ら 0 P う 苦 0 甲 迄 血 さ

平 次 は そ れ を尻 目 に、 小 半 - 刻水甕 に 噛 ŋ 付 15 調 べ て お ま

た

が

の

柄し

杓~

は

新

し

11

ょ

う

だ

が

何

時

か

ら

使

つ

て

ます

か

お冬を 顧 み 7 ح う 間 11 か け ま す

多分 昨夜、 つ 買 古 *()* 11 方 置 き 0 柄 0 杓 新 が 13 わ 0 が れ あ て つ ま た つ 0 た を ع 権三 か 言 郎 つ が て お お ろ ŋ ま た

で御座いましょう」

これだッ」

何ですえ、親分」

とガラッ八。

掛 は ح つ て、 0) 柄 杓 だ 0 ちょ 11 ع 気 が 7 か な 11 が よく 見 る 底 が

ける 二重 な は 火箸を 果たし て 持 そ b 0 9 う 間 て 来 に 薬 て 9 底 が が 外 仕 あ 側 込 か ん つ て 5 で あ 新 そ つ た 0 6 中 11 だ 柄 ょ 綿 を で コ

明

つ

17

「あッ」

した。 驚き騒ぐ 人 々 の 中 ^ ` 平 次は盆 0 上に載せた 柄杓を持 つ て 来ま

をし 込むところでしょうが、 家 この 買 の 者 て、 つ て来まし ならこ 通 そ **9**, つ ع ん 種 たえ」 柄杓を換えて置 な手数なことをせずに、 は 矢張 り外 曲者は外にいるから、 か ら仕込 いたん ん だもの でしょう いきなり水甕 に こんな手数なこと 違 e s され あ へ毒をブチ り は ません。 体

「死んだ三吉で御座いました」

降 よう ŋ お冬はそう言 か に吹き払 か った、 って、 わ 度目 れ て 朩 しまっ 0 恐ろ ッ と胸 た を撫 のです。 4 疑 でおろ 11 が、 また平 しまし た。 次の 明 自 察 分

七

それにしても又五郎はどうしたんだ」

ります 言葉も 住 子 ん の 詫^かび 思 で 11 ある位 を入れる定石 出 11 て たよ で これほど 何 うに か 騒ぎの にな 又佐 0 騒ぎを つ 衛 ある て 門 e s は 知ら る時 時 そ 駆 う な 代 け 言 0 9 11 11 け ح ま と言うのもどうか とです。 る た。 0 が、 火 勘 事 ッ 当され 1 息 垣隣 子 た息 りに 11 う

「成程、そう言えば変ですね」

だから、

「だから、 あ 9 は言 つ たん で どうもあ 0 垣 0 外が臭 4 9

とガラッ八。

5 か 八 そ ん な下ら な 11 事を言 つ て 11 る 暇 に • ち ょ 11

と覗いて来るがいい」

平 次 たしな め られ て、 尻り 軽がる < 外 ^ 飛 ん で 出た ガ ラ ッ 八、 間 b

な まま れ たような 顔を て 帰 つ て 来ま た。

可ぉ 怪ゥ しな 事 が あるも のだ、 もう昼だ って言う 0 に まだ 雨

開いてねえ」

「何、まだ雨戸が開かねえ」

親分、 恐ろ *()* 寝坊な家もあ つ た もん で す ね

そ () つ は 可 怪 () 0 来 *(*) ガ ラ ッ 八

0 わ が れ 平 ると、 次は 走 ったよう 弾き上 又佐 衛門 な心持になります。 げ 5 もガラッ れ たよう 八も、 に 起ち 上が お冬も背筋をサ り ま た。 改 ッ と冷 め て そ た う言

庭 を 穾 つ 切っ て、 垣を飛び越えると、 平 次 は 11 き な ŋ 雨 戸 を

引っ叩きました。

今 白は、 今日は、 隣 か ら来まし たが ね、 田 代 屋 0 日 那 が 御

用があるそうですよ」

ラ 寝 せ 坊 ん。 ッ八 続 け様 で に手伝 赤々 に と雨戸 鳴 雨 5 わ 戸を せて、 しまし 閉 に落ちる陽 め た 到 て 頭雨 置か が 中 戸を一 ざ れ は る 時 はもう昼近 静まり返 枚 刻 外 で は あ てしまい つ て ŋ 11 ま 物 で せ の まし 気 ん。 ょ う。 配 た。 平 もあ ど 6 り な ま

「あッ」

足

中

^

踏

み込むと、

碧。

血

0

海。

血り 嘔~ 又 Ŧi. 吐ど 郎 0 とそ 中 に、 の 艦ょ 女房 褸ぁ 切れ 0 お 半 のように は • どん 醜く なに 歪が められ、 もがき苦しんだことか、 つくねられ 捻

ザ サ ŋ 9 ッ 描 け き出 5 つ れ て、 しました 死 6 ح で の陰惨な情景を、 e s た の です。 雨 戸を開 何 0 蔽 け うところも た間 か 5, な 春 0 7 光 ザ が 7

供 は ? 留ちゃ λ は ?

0 本 蹤っ 能 11 に て 還 来 って、 た お冬 顏 は 見 知 あ ま り 0 り 子 0 恐 供 ろ 0 名を さ 呼 に 顔 W を で 反 お け ります な が 5 女

だ ここ だし

寿 命 を 眼 抱 を いて ガ 開 ラ 来 燃 11 ッ ま Þ て まぶ した。 は、 切らず、 部 しそう 食べ 屋 0 た 身 隅 に 体も 物 四^ぁたり か が ら を 少 動 な 菜 見 か ず 廻 か つ 声 葉 つ ます。 b た 0 立 ょ 0 てま か う に せ な ح れ ん つ ば が て か 11 頼 る ŋ 留 ŋ 吉 まだ な を

留ち Þ 6 好 留 ちゃ 叔 母 ん 抱 大丈 か れ て、 夫 か それ 4 で し つ 留吉 か り は 僅 て お か < れ

0

0

11

に

P

ŋ つ ŋ Þ 9 7 お ŋ ま す まだ、 驚 ほ ど 0 気 力 b 泣 ほ تع

0 気力 P 恢 復 な 11 0 で ょ う。

大 文夫だ ょ 留 ち Þ 6 \boldsymbol{b} う 大丈夫だ ょ 叔 母 ち Þ W が 9 11 7 11

る から お 泣 き で な 11 ょ

お冬はそう言 11 な が 5, 留 吉 を 抱 11 て、 母もを 0 方 ^ 帰 つ て 行 き

ます。

10 ^ 後 取 そ 0 0 9 事 後 て 返 を 姿 頼 を し て、 ツ ん で ク 薄 " 追 暗 ク 見 11 11 立 中 送 に て つ ら 蠢さ た れ め 平 るよ く 次 0 う 々 何 を K を サ 考 応 え ッ 見 た ح 戸 廻 か す 外 ع 自 ^ 飛 町 分 出 P 0 ま 達 屋

親 分 ど ح ^ す

後ろか らガ ラ ッ 八 ح れ は 下 駄と草履を片跛に 穿 11 7 追 2 か け

つ

に

笹

野新三郎は

妙に

開き直ります。

か

な

()

ع

いう

0

か

ます。

「八、お前は暫くここにいるがいい

「ヘエー」

「俺は少し行って来るところがある」

「あれ は一体、 どうした事でしょう親 分、 あ つ には ら

ねえ」

「正直に言うと俺にも解らないよ」

「ヘエー」

うで、 八、 どうもジ 恐ろしい 事 ッ としちゃ だ。 W Þ () bられねえような気が つ とも っと恐ろ するんだ」 11 事 が 起こりそ

「親分、大丈夫ですかえ」

「親分」

八

のお 家督 0 旦那様、 平次ともあろう者が、 田 フ 半 知恵を拝借 代 争 刻 屋 ば いとか、 一の一件 大分 か これは一体どうした事でございましょう。一と通りの ŋ 変 0 ばか 金が 後、 つ して何とか目鼻だけでもつけとう御 た 事件ら りは、 仇 八丁堀組屋敷で、 の騒動なら、大概底が見える筈ですが、 すっかり悄気返って座 まるで私には見当もつきません。 11 が、 平 次、 与力笹野新三郎 お 前は本気で見当が っておりました。 座 います」 の前に銭形 旦那 ح

がします」 11 ま せ エ 6 が そう仰しゃられると、 あま り 事件が大きくて、 満更考えたことが 私 は恐ろ な 11 ょ で う は 御 な 気 座

れば、 角、 それ見ろ、 思 私の考えたことも話 11 つ () ただけを言 銭 形 の平次に って見 ح してやろう」 れ るがよ ほ どの 事 *()* が 解 お 前 ら ぬ で 解 筈 5 は な ぬ 11 ع があ 兎

有難う御座 e s ます。 旦那樣、 それでは、 平 次 0 胸 に あ ることを、

何も彼も申上げてしまいましょう」

丸橋 あの、 忠弥 田 代屋 味 0 謀は 又佐衛 叛を訴 門 ع e st て、 う 0 現米三百 は、 確か、 俵、 慶安四年 銀五十枚 0 の御褒美 騒ぎに、

をお上から頂 4 た親爺で 御 座 いました な

そ の 通 りだ。 そ れほど知 つ て いるお前が、 何を迷うことが あ

のだ」

正雪、 \boldsymbol{P} ので ヘエ 丸橋 御 座 忠弥の残党が、 () すると矢張り、 ま しょう か 田 田 代屋 代屋に昔 ___ 家 の怨みを酬 内 0 紛め 紅さ で すた は なく め と考え て、 由 井

先ずそう考えるのが筋道だろうな

右 町 衛 0 田代屋が 門 を始 師 藤 め、 깯 一と先ず片付けば、 郎 御老中 続 11 方お屋敷 7 は、 返 ^ り 次は同じ b 忠 仇 し をするも 7 御 く 忠弥 褒 め を訴 に 0 と見な 預 人 つ た け た本 奥 れ 村 郷 ば な 郎 弓

その通りだよ平次

りませ

又浪人共を狩 り集め て、 謀反を企てる者がな () とも申されませ

22

そこまではどうだろう」

南省は すに そ 筋じ は に 町 ても 0 生 ·薬屋 不 思議 な で どに もあろう な 0 は、 ザ ラ あ に 0 売 毒 薬で つ て 御 11 る 座 品 11 ま で す。 は な 医 11 者 0 分 申

0 秘 法 0 毒 薬 か

ع

平 次 お 前 は あ 0 事 を 知らな か つ た 0 か

と仰 しゃ 4 ま すと

田 · 代 屋 家 0 騒ぎは 大 た 事 で は な 11 が、 私 に は そ 0 毒

所 0 方 が 心 配 だ

る 人の耳に入ったら最後、 が、心得 平次これ 0 は ため お 上 に話 の 秘密で、 してや 江戸中 ·
ろう。 誰 の に b 騒ぎにならずには済むま 漏も 明かされ らしては な な いことに ら ぬ ぞ、 な 万 4 々 つ て 11

ヘエ

毒薬 11 丸橋 う 笹 11 b が 野 新 隠 蛮 忠弥召捕 0) 三郎 で 秘 し あ 法 て あ つ 0 は たし 大毒 つ 0 自 た。 時、 分 薬で、 b 麻布二本榎の ح 膝い れ 行ざ は り と樽 由井正雪が島原 寄 つ が の寺 て、 何 前 万 平 の貸家に、 次を 0 命 で調合を教 小 を 手 取る ·招 ぎ 三百三十樽 ح わ 11 まし う つ たと た 0

持 味 る 中 悉 に であろうな」 玉 9 大騒ぎを起させる Ш 7 行 お処刑 に 流 つ て 焼き払 に 込 なって ん で、 わ 目論 江 れ 毒薬 戸 見 0 は 武 0 お上 ところ、 家 れだけ 町 の手に を鏖殺し 丸 0) 事 召上げ 橋 は 忠 に お 弥 前 ら 0 な b 召 れ 11 聞 捕 ま 知 越 ŋ で 中 か つ 島 ら 江 て お 戸

^ 工 存じ て

お

ります」

二百三十 ところが、二本榎 樽だけ で、 あ 0 と百 貸家で見 樽 0 行 つ 方 か が つ どう た毒薬と し て b e s う 判 の ら は、 ぬ そ

エ ッ

方を が か の首 5 何 始 味 百 領 樽 年 め 0 0 者 か 0 毒 南 経 田 は 誰 北 0 つ 行 郎 b て 0 しま 方 御 兵 知 奉行、 は 衛 ら ず、 なん は、 つ た ع 下だ 係 鈴 って ガ り 森 7 0) 平見某は 我 b で 腹 判らず、 々までも、 を切 \square つ を 忘るると て 緘ぐ ح との ま ん で つ 外心 た。 b 殺 な さ 御老中 配 れ した そ

 \boldsymbol{b} 毒 町 戸 薬 とよ 若 0 Þ か 上水 しそ 生薬屋 ら り、 取 に ひいては天下の騒ぎだ。 投 百 出 で売るような品でな げ 樽る したも 込ま の毒薬が れ 0 かも るような 由 比 知 れ 丸橋 ぬ ことがあ いとすれば 田 代 屋 の残党の っては、 一家鏖殺に使っ ある 手に入り、 江戸 () はそ 中 諸 の百樽 0 た毒は 難 方 儀 0 井 は 0

百 平次、 樽 の毒 薬 ح れ を は 取 大変な事 ŋ 上 げ やる、 なけ だ、 れ ばなら 刻も早く曲者の め。 手不足ならば、 所在を突き留 何 めて

そ れ 笹 野 で 新三郎 も声 だ け 0 は、 思 11 凛 入 ع った顔を、 し て お りま 平次は眩 た。 しそう に見 上げ なが 5

何

百

人でも手

伝

わ

せ

て

どうだ」

旦 那 様、 暫く この 平次に お 任 せを願 () ま す

何

人 の代 数を配 せ り、 め て 弓 り 万 師 H 藤 几 日 0 郎 場合 ح 奥村 に 備^をな 0 平 え 八 次 郎 て 0 頂きとう御 右 必 衛 死 門 0 は 働 じ き 座 を め 御覧下 11 ます、 御老中 さ 方 そ 11 お ま 0 手段は 屋 敷に そ

平 次は新三郎 0 耳 に П を 持 つ て 行きま

九

混雑 住 主 ながらも忙しそうに立ち働 ん 平 で 次 0 で 又佐衛 すが () は た そ 又五 0 幸 門 足 郎 ح で 4 す 他 相 夫 の人達 対 婦 ぐ 田 0 代 た 死 は 体 0 屋 11 て 全部元気を取 は 0 ^ 始末を お もう夕暮 取 ります。 つ て 返 し て、 れ。 しまし ŋ 返して、 家 小 僧 た。 の 中は の三吉と、 奥 上 青 ^ を下 通さ 11 顔を 隣 れ ^ て、 0 に

実 は 1 ヤ な事を お 聞 か せ し な け れ ば な りませ ん が 11 ()

毒を 盛 った 人間 何奴の目 星が つきましたよ」

ヘエ、 どこの で 御座 います」

腕 0 痛 みにも、 毒薬 0 苦 しさに bめ げ ず、 相 手 が 判 つ た 聞

と又佐衛 菛 は膝を乗り 出します。

そ れが 厄 介 で、 いよ いよこの家 か ら、 縄 付 を出 さな きゃ ア な ŋ

ませ ん

「矢張りあ 0 女で

e s や考え違 11 なす つ ち Þ 11 け ませ ん 御 新造 は 何 に P 知 ŋ は

ませ ん

^ エ

せた 반 風呂場 た ましたが り、 り、 から吹 恐 柄なし ろ 杓ゃく 曲 し 0 矢を 者 底 4 手 0 ^ 片 盗 仕 0 割 込 掛 W ん れ を で だ細 は、 外 て、 矢張 工 ^ をし 摿 外 り か て て、 ら毒 て の家 相 私 を 棒 持 に 0) 0 眼 ち 中 土 を 込 に 0 誤ご ん 中 11 だ る 魔ま ^ 化そ ょ 踏 に 相違あ う み うと 込 に 見 ま

が

大

物

で

す

それ

 \boldsymbol{b}

あと

刻

0

命

ょ

う

今

頃

は

捕

方

同

ŋ ŧ せ ん

誰 で す、 そ 0 野郎 は、 早く 縛 つ て 下 さ *()*

家 う e s す 曲 Þ 11 る 者 曲 で そう手軽 すから、 者と、 外 に に は __ 筋 行きませ 11 縄で る 仲 は 間 ٤ 行きませ W 田 ~ 代 ん λ 屋一 に 家を鏖殺し 縛る手 もう 筈 刻経 が に 出 て 来 ば ようと

田 . 代 屋 家を 怨 む者 とい うと 若 P

りま

気 が つきまし たか 旦 那、 あれ ですよ、 丸橋 忠 弥 0 味

工 ッ 家の 中 の誰がその謀叛人の片割れです、 太 *()* 奴 だ

あ の シ 奉 ッ 公人とも養 静かに、 人に聴かれちゃ 11 娘とも つ か 大変 ぬ お 秋 つか あ ぬ事 0 を 女 訊 0 身許 きますが が ょ

判 つ て いましょうか」

11 そんな事はあり Þ しません。 あ 0 娘 に 限 つ て

あ 0 0 毒に 中てら れた 苦 みようが、 番 ひ どか 9 た が 他

人とはどこ か調子 が 違っ て e s は しません でしたか」

そう言えば

の 声 は 次第に 小 さく な り ま す

四方を籠 め て、 次第に濃 くなる 闇 0 色、 そ の 中 に 何 Þ 5 め

0 は、 隣 室 から二人 の 話を立ち聴く 人 の影 で しょ う。

女だ 三年こ 0 方目 を か け て Þ つ た 恩 も忘 れ 7

と 又 佐 衛 門、 腹立ち紛れに ツイ声が高く な ります。

騒 11 Þ 何 にもなりませ ん。 あ 0 で 女は 雑さ 魚だが、 外 に 11 る 0

心 者 が 百 人ば か ŋ もう 八丁堀から繰 ŋ 出 した頃 Ð

袋 0

中

0

鼠

P

同

様

す か 平 次 の声は、 潜さ めながら妙 ます。 力が籠 つ て、 部屋 のそとまで、 か

な が ら 聴き 取 れ

7 後前 間 b を見廻しながら水道端 な く 田代屋を抜 け 出 した一人 の宵暗を関 0 女 \Box 0 心四方を見廻しまい方へ急ぎます。 小風呂敷を 胸 に 抱 11

羽目 が 板 日ち 砂利屋が建て捨てた物置小 坂が へ拳を当てて、 の 下まで来ると、 二つ三つ 足を停 妙な 屋 の後ろ めて、 調子 に ^ 廻 応 叩きました。 ると、 節穴だら しま けな た

誰 だ ?

中 -からは錆 0 ある 男 0 声

兄さん、 私

お 秋 か、 今頃 何 に 来た

大変よ、 手 が 廻 9 た 5

シ ッ

中 か ら コ ŀ リと 桟ん を す と、 羽 目 板 ع 見え た 0 は 潜ぐ ŋ 0

闇 0 中 へ大きい 口がポ カリと開きます。

どうしたん だ、 話してみろ」

せて e s た 龕がん 燈を起すと、 円 11 灯 0 中 に、 兄妹二人 0 顔 が 赤々

と浮 出 します。 蒼白 e s 妹 のお 秋 0 顔 に 比べて、 赤黒 11 兄 0 顔は、

何 と言う不思議 な対照 で しょう。

を 手 藍ぃ 微じ ようと言うの 龕 塵ん 燈 0 を提 意気 げ、 な 袷 で を着 右の手に しょう。 て お は一梃 年 ります 0 頃は三十二三、 の斧を持 が `` 身体 って b 顔 何と () bる 泥 な だ 0 は 5 け 体 脈 左 何 0

物 凄まじさ の あ る 男前

兄さ 6 あ ع 刻き 経 た な 11 う ちに ح ^ 役 人 が 乗込 ん で 来ま

す。 捕 方同 心 隊百 人 ば か ŋ 八 1 堀を 出 た 11 う 話

誰 お 秋 が 0 息 ん は 事 は ずみ 切 つ て お ŋ ます

銭 形 の 平 次

そ

な

を言

つ

た

どこ で

田 屋 0 奥 で 旦 那 話 て 11 る 0 を 聴 11 て 夢 中 に な 9 て 飛

出して来ま

馬 鹿 ッ

平 次がそ ん な 間 抜 な 事を、 人 に 聴 か れるよう に言う筈はな 11

お前があ わ 7 7 飛 出 ロす後を跟い け 7 俺 の巣を突きとめ る計略 だ

たん だ。 何 ح 11 う 間 抜 け だ

エ ッ

思 わず 振 ŋ 向 な 秋 0 後 ろ ヤ IJ 笑 つ 7 突 9 立 9 7 61 る

は、 果 て 銭 形 0 平 次 0 顔 で す。

あ ッ

驚 ぉ 秋 を 突き退 け 7

御 用だぞ 神 妙 に 반 11

歩平 次が 進む ٤ 早く b 五六 歩 飛 退 11 た 曲 者 龕がん 燈き を 高 々 ع

振 ŋ 上げ て 平 次を睨み据え ま た

焔硝樽だ 寄る 0 な、 こ 0 龕がん 燈き 先を見ろ。 向 う に あ る 真 つ 黒 な は

微度ル に 吹き飛ばされた上、 あ 0 中に 放 り込 め ば 百樽 0 俺 毒薬 b お は、 前 b 神 田 この 上水 物 の 置 大場とい 0

中に流れ込むぞ――

寸^{すんごう} 0 隙 b な 11 相 手 0 気 組 <u>ک</u> そ 0 物 凄 11 顔 色、 わ け て b 思 11

b ょ らぬ言葉に、 さすが 0 平 次も驚きまし た

毒薬 だ 0 を な 寄 つ たん 知 る つ 0 うち、 な平次、 て つ だ。 て いるん 上水 年月経 百樽をここに隠して、 だぞ、 退か の 大樋まで穴を掘 な つ サア、 て、 11 か、 誰も気が どうだ 丸橋先生、 り、 つかずに 神 毒薬 田 柴 川上水 田 0 その 樽を 先 生 に 投 儘 が 流 三百 ŋ に 込む な し込 つ む ば 7 計 11 略 0

平 次もさす が に驚きましたが 相手 0 気 組 を見ると 全 そ れ

位 0 ع は Þ り 兼 ね な 41 0 は 判 ŋ 切 つ て お りま す。

る 待て待 0 は 本意 て、 では そ ん あるま な 無 法な事を *,* 1 天運とあきら し て、 江 戸 め 中 て 0 人 神 間 妙 に に 難 お 縄 儀 を を 頂 か け

何を 馬 鹿 な、 俺は 死 6 で も仇 は討 てるぞ、 見ろッ

せ

()

を 右 平 手 次 に 閃 は く 得 龕 意 燈、 0 投 そ げ のまま、 銭、 掌で を で宙に 後ろ の焔硝樽 翻れ す 青銭が 投げ込もうとする 枚飛んで、

「あッ」

曲

者

0

拳

を

ハ

タと打ちます

燈 を 取 り 落 とす ح 同 時 K 飛 込 6 だ 平 次、 暫 闇 0 中 に み 合

11 ま したが どうや 5 組伏せて早縄を打ちます

物 置 の 外 ^ 出 ると、 ガラ ッ 八 れはお秋を縛 つ て 漸 縄 打 つ

たところ。

「親分、お目出とう」

「お、八か、骨を折らせたなア」

達 三郎とそ ようと言う大変なことを目論 で老中松 捕まえた 怨を 酬なく 平 0 伊 妹 曲 11 豆守、 お 一者は、 秋、 太平 慶安 阿部 由 0 夢を 比正 豊後守 0 貪 雪、 変に毒薬係を勤 る ん だ をは 丸橋 江 0 戸 忠弥そ で じ 0 し め、 町 た。 達 0 め に 他 た 味 平見 *p'* 0 者 党 某 に 0 辛ら 遺 と 泡^あゎ 0 志 弟 か を 同 吹 り 継 苗 か せ 兵 11

兄 そんな事 調 べたら は が 面 行 白 知 わ れ いこともあ れたも ず 処刑され のです。 つ た て で ま ようが、 いま した。 人 心 0 0 時 動 揺 代 を 惧を は れ て、 ょ

きま 郎 時 で 11 ŧ て、 あ 々 平 に 次は老 思 반 つ け たが 嫁 て お ٨ 11 込 退の 出 秋 0 お それ 中 け まれたん つ て娘は 冬が憎 る たように 阳 相 部豊後守の 変らず蔭 もしか だ。 くて憎くてたまらな 可哀そうだ 恋に 0 気にするような平次ではありません、 仕 お目通りを許され、 事で、 目 の つ たよ。 眩ら 表沙 ん だ 女は、 汰 4 田 代 ところへ 0 屋 手 柄 ど 身 0 $\bar{\lambda}$ 又 に に な大 次 b余 兄貴 郎 功 る言葉を 胆 名 に なこと の 惚ほ 兵三 れ 頂 7

(編注)

ます。 底本の 作品中には、 なる古典的な文学作品でもあり、 が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異 ままとしました。 身体 の障害や人権に ご理解、 ご諒承のほどをお願 かかわる、 著者が故人でもありますので、 差別的な語句や表現 い申し上げ

挿絵―萩 柚月

初出 「文藝春秋オー ル讀物號」 昭和七年二月号 文藝春秋社

底本 月五日初版 「錢形平次捕物全集」 第一 巻 河出書房 昭和三十一年五

編集・発行 銭形倶楽部



銭形倶楽部

http://www.zenigata.club/